

## 論文の和文要旨

論文題目	日本人英語学習者のライティングにおける結束性の特徴
氏名	工藤 洋路

日本の中学校から大学までの英語ライティング指導の現状では、文と文とのつながりが適切な英作文を書く力が不足していると言われている。中学校段階では、隣り合う2文において意味的に適切につながる文章を書く能力、そして大学段階でも、一文一文が意味的につながり合っている論理的な文章を書く力がそれぞれ必要であるが、文と文とのつながりが適切であるということは、結束関係が構築されているということである。本論文では、文と文とのつながりを表す文法的結束関係に注目し、日本人英語学習者の英語ライティングにおける結束性の特徴を研究対象とする。

ライティングにおける結束性の研究の基盤は、Halliday and Hasan (1976) が提示した概念に依る部分が多い。結束性という概念を形成している機能は、指示 (reference)、代用 (substitution)、省略 (ellipses)、接続 (conjunction)、語彙的結束 (lexical cohesion) の5つである。結束関係は、基本的には文と文との関係を意味するものであるため、結束性の観点をライティング研究に適用すると、文と文との間またはパラグラフまたはディスコースの単位の意味的または文法的な関係性を書き手がどう構築するかに関心を当てることになる。本論文では、文法的結束性の4つの要素に注目することとする。

結束性は多くのライティングテストの評価基準や能力枠組みの中でその下位項目として組み込まれていることから、全体的なライティング能力の一部を構成する要素と言える。さら

に、いくつかの言語能力モデルにおいても、ディスコースに関わる能力あるいはテキストを構成する能力として、全体的な言語能力の下位能力として位置付けられている。したがって、英語学習者の作文における文法的結束性に関わる表現の使用傾向を明らかにすることができれば、全体的なライティング能力あるいは言語能力の一部を解明することに貢献することができるため、研究の対象とする意義がある。

ライティングにおける結束性についての多くの先行研究では、ライティング能力が高い学習者の方が、接続表現や指示表現の使用頻度が高いとしている。また別の研究では、接続表現や指示表現の使用頻度は、上級レベルの学習者については、減少する傾向があるとしている。つまり、こうした表現の使用頻度は、学習の初期段階では非常に低いが、学習が徐々に進むにつれて、使用頻度が上がり、上級レベルに到達すると、今度は減少していくということである。言い換えれば、接続表現や指示表現の使用頻度については、逆U字型の発達段階を描くということである。さらに別の研究では、表現の使用頻度ではなく、使用できる種類数が全体的な能力と相関関係にあるとしている。個別の表現を調査した研究によれば、and、but、because、so は L2 学習者が多用する接続語である一方、母語話者は、however、yet、therefore、thus などを L2 学習者に比べて頻繁に使うとしている。日本人英語学習者を対象とした研究によれば、but、so、because などを過剰使用する傾向があり、定冠詞 the の使用頻度は低いとされている。また、中学生から大学生までを調査対象とした研究では、ESL 学習者と同様に、接続表現は学習が進むにつれ使用頻度が高くなるとしている。ただし、求められる文章タイプによって結束性に関するパフォーマンスが変化するという研究もある。コーパス研究が発達し、非常に多くの学習者データから結束表現の特徴を学習段階ごとに分析できるようになり、さまざまな特徴が判明してきた一方、別のトピックで書かれた作文同士を比較している研究や、学習段階ごとの傾向を調査した研究のほとんどが横断的な研究であったことなど、全体として調査方法に偏りがある。これらの先行研究を踏まえて、本論文では、日本人高校生と大学生を参加者とし、同一のライティング課題の下で書かれた作文について、文法的結束性の観点から検証することとする。また、高校生については、一定期間を空けた上で、再度同じ課題を実施することで、縦断的研究の要素も取り入れることとする。研究課題は、「(1) 物語文と意見文の文章タイプのそれぞれの作文において、文法的結束性の 4 つの要素の適切な使用の頻度と種類は、高校生と大学生の間で異なるか。」と「(2) 物語文と意見文の文章タイプのそれぞれの作文において、高校生の学習者における文法的結束性の 4 つの要素の適切な使用の頻度と種類は、それぞれどのように変化するか。」である。

研究の手法は、高校生と大学生に物語文と意見文のライティング課題を実施し、作文の中で結束関係を構築している言語表現を抽出し、グループ間でその頻度や種類数を統計的に検定する。高校生については、同一課題を一定の期間を空けた後に実施し、同じ観点で、1回目と2回目の間の発達を検証する。

研究の結果、研究課題(1)に関する解答として、まずは、両文章タイプにおいて、大学生が用いる接続表現と指示表現の種類数は、高校生よりも多数であることがわかった。接続詞の *when* など中学で学習した語であっても、高校生のライティングの中では使用があまり見られなかったものがいくつか存在することがその理由である。また、高校生は大学生よりも *because* を多用するが、それは、大学生に比べると、高校生は1つの観点での談話を維持できる能力がないことに起因する。したがって、談話の内容を質的に変えることをせずに、単に *because* の数を減らしただけでは高校生の作文は大学生の作文に類似しない。他の表現で高校生と大学生の区別が可能なものは、*however* と *the* の使用である。*however* の使用が見られることは、初級者が過剰使用する *but* の減少にもつながるため、ライティング能力において熟達が見られたことが想定できる。同様に、*the* を結束的に使用できることは、人称代名詞や指示代名詞以外の手法で指示対象を言い表すことができる能力を示しているため、*the* を使うと表現手法に多様性があると判断できる。さらに、順序を表す *first* の使用頻度は大学生の方が高い。それは、書く上で談話の構成や内容の展開を計画していることの表れであり、このプロセスは熟達した書き手が見せるものである。また、*first* を使うと、隣接する文を超えた結束関係を結ぶことができたため、高度な結束関係を構築できる。したがって、*first* を使い始めると、ライティングにおいて熟達が見込まれるという示唆が提示された。

次に研究課題(2)に関わる縦断的な研究の成果として、高校生は物語文において、時間・順序を表す表現の使用頻度が増えたことがわかった。個別の表現として増えたのは、*later* と *then* であった。研究課題(1)に関わる調査でも同じく時間・順序を表す表現の使用に大学生と高校生で差があったが、その理由は *when* の使用に差が生じたことであった。しかし、今回の高校生間での有意差は、*later* と *then* の使用であった。これらは接続副詞であり、日本語との構造の違いで使用するのが難しい従属接続詞の *when* とは異なる。つまり、発達は見られるが、大学生にまだ近似していない段階での発達であることが推定された。同じように、意見文における指示表現の使用頻度が向上した。最初の研究でも高校生と大学生の間で指示表現の使用頻度において有意差が見られたが、使用の質を検証しところ、発達の内容が異なることが分かった。大学生は、意見文を客観的な視点で書くために指示表現の *they* や

them を多用したが、ここでの高校生は、主題についての談話を継続するために指示詞の there を多用するという基礎的な段階での発達であった。したがって、さきほどの later と then の例と同じように、高校生の間で見られる発達は第一歩の発達であって、まだ大学生には届かない。つまり、発達の段階性の存在がこの研究により認められた。

このように、個別の表現レベルで、高校生と大学生、そして 2 回分の高校生の間での比較をとおして、差が生じる表現とそうでない表現が見られた。さらに、差が生じた場合は、質的に使用例を調査することによって、差がもたらされた原因を推定できたことで、具体的な表現については、発達段階を踏まえた教育的示唆が可能となった。